

曹操樂府詩私論

柳川 順子

魏の武帝曹操は、卓越した戦略家である一方、詩歌を作り、それを管弦樂の調べに乗せて歌わせた。『魏志』武帝紀の裴松之注に引く『魏書』に次のようにいう。

軍を御すること三十餘年、手には書を捨てず、昼には則ち武策を講じ、夜には則ち経伝を思ひ、高きに登りては必ず賦し、新詩を造るに及びては、之を管弦に被らせ、皆 樂章を成す。

ここにいう管弦樂に乗せられた歌辞、すなわち樂府詩は、魏に先立つ後漢の時代、基本的には詠み人知らずの俗樂歌辞であったが、ここにおいて、それは固有の人物が自らの名を記して作る文學へと脱皮した。文學史上、このことが画期的な出来事であったとは誰もが認めるところだ。それでは、曹操はなぜ樂府詩を作ったのだろう。この問題についても、すでに多くの先人によって論究し尽くされている感がある。それでも、私なりの推論を付け加える余地もなお幾ばくかは残されているように思うので、敢えてここに贅言を弄するのである。そこで、はじめに私論との分岐点を明らかにしておきたい先行研究を掲げ、それとの対比において本稿の立脚点を示しておきたい。

まず、曹魏王朝における文學隆盛の要因については、渡邊義浩氏がすでに論じている。渡邊論文は、従来の研究を、歴史学・文學の両分野に渡って網羅的かつ包括的に紹介しながら、更に社会学者ピエール・ブルデュエの提唱した「文化資本」という概念を援用しつつ、「曹操は、儒教的価値の優越性を梃子に文化的諸価値を専有する「名士」層に対抗して、新たな文化的価値の創出を試みた。それが「文學」である」との新見地を提示した^①。この論はその後、曹操の個別具体的な作品にまで考究対象を広げ、彼の樂府詩の本質を、帝王としての志を表現した、政治目的に従属する文學と捉える結論に至っている^②。

さて、この一連の論の前提部分、すなわち、漢末の時代、儒教的教養を基本に持つ名士層が文化資本を占有し、その仲間同士の交友関係やそれに伴う情報交換などによって、皇帝権力にも拮抗しうる勢力を上層社会の縦横に広げていたということ、そして、天下統合を目指していた曹操が、かかる名士層に対して強い対抗意識を募らせたということについては、多くの読者と同じく、私も全面的に納得させられた。また、曹操の文学が政治に従属するものだとする見解にもまったく異論はないし、建安の文学が、儒教からの離脱、文学の自立という志向性を強く持っていることも確かだと思う。それでは、曹操を主催者とする建安文壇は、漢末名士層の儒教的価値観に対抗すべく創出されたものなのだろうか。私には、その内実はもう少し複雑であるように感じられる。というのは、この時代の知識人たちにおける教養の実態を見てみると、渡邊論文自身も認めているとおり、儒教は必ずしも文学と対立する概念ではないからである③。また、曹操の学術や文学に対するスタンスを見るに、それらは必ずしも、彼がその命を賭けていたに違いない軍事や政治と同じ位相にあるとも思えないからである。曹操が、その楽府詩制作において後漢名士層を強く意識していたことは間違いないと私も考えるが、その意識の内実については、更にもう一步踏み込んで考察する余地が残されているのではないだろうか。

それでは、曹操における文学重視は、教養豊かな知識人たちへの歩み寄りだろうか。岡村繁氏は、建安文壇の意図した方向を、従来しばしば言われてきたような民間文学への接近ではなく、むしろ逆に、漢代より続く貴族文学への迎合であり、その枠内での磨き上げであったと見る。宦官の家柄出身の曹操が清流の官僚貴族を使いこなすには、彼らエリートたちを凌駕するに足る教養を身に付ける以外なく、かくして曹操は、後継者となる曹丕や曹植に対して学問の修得を切望し、有閑的遊戯文学に没頭することさえも容認して、かくして形成されたのが建安文壇である、と。そして、この文壇において大きな比重を占める楽府詩については、民間の歌謡曲に合わせた歌辞が、魏の宮廷音楽として管弦楽の華麗な伴奏つきで歌われている事実に着目し、結局、曹操の楽府詩とは、権力の誇示宣伝を計算高く目論む、およそ民衆とは無縁の貴族趣味的文学であったと見切っている④。

この岡村論文を踏まえつつ、曹操における樂府詩制作の意図に焦点を絞り込んで論じたのが道家春代氏である。道家論文は、彼の作品の題材と主題を、魏の建国という史実に照らして詳細に検討し、曹操の樂府詩が、彼を取り巻く様々な立場の人々に向けて、自らの政治的立場を宣伝するために作られたものであることを実証している⑤。

さて、この二つの論に対して、本稿はいったい何を付け加えることができるだろうか。岡村論文が夙に指し示した方向性は、公刊後四十年余りが経過した今もなお、その妥当性を失っていないと私も判断する。ただし、魏における樂府詩勃興の歴史的意義については、若干の異論がないではない。岡村論文は、樂府詩というものを民間歌謡と捉える従前の定説をそのまま踏襲しながら、その演奏形態とそれがもたらす効果という側面から、これを上述のごとき貴族趣味的文学と捉え、そこに漢代文学からの連続性を見ようとしていたのであったが、まず、樂府詩は後漢時代、もはや民間歌謡として行われていたわけではなかった。歌辞を乗せた俗樂は、洗練された遊戯文芸として、この当時、上層階級の人々の間で広く親しまれていたのである⑥。とはいえ、そうした俗樂への填詞が知識人たちの間で何の抵抗もなく行われていたかという点、実態は必ずしもそうではない。漢代の文人たちと曹操との間には、樂府詩制作に対する意識においてかなりの落差があるように思う。したがって、樂府詩という文芸様式を政治目的に利用した曹操の思惑を究明し、そのことが持つ歴史的意義を明らかにするためには、まず樂府詩と後漢知識人たちとの関係をもっと丁寧に洗い出す必要があるだろう。

更にもう一点、ここで付言しておきたいことがある。それは、樂府詩と一口に言っても、曹魏王朝においては、『宋書』樂志にいわゆる「相和」と「清商三調」とは明確に区別されていたと推測されることである。私見によれば、「相和」十七曲は、その多くが漢王室由来の、ある種特別な意味をまとった歌曲群であるのに対して、「清商三調」に属する諸歌曲は、相対的に新しい、本質的には娯楽を目的とする宴席文芸であった⑦。曹操の樂府詩には「相和」「清商三調」の双方があるが、本稿では、前者はひとまず措いておき、「清商三調」歌辞の方に注目したい。というのは、「相和」歌辞は、いわばいわくつきの歌曲の替え歌であって、そうした歌曲を取り上げたこと自体に意味性を読み取る必要が出てくるか

らである。本稿で考察するのは、冒頭にも示した「新詩を造るに及びては、之を管弦に被らせ、皆樂章を成す」という曹操の行為の意味である。それは彼のどのような思惑に出るものであったのか。そして、漢末名士層と曹魏政権とのせめぎあいという当時の状況において、この娯樂的俗樂への填詞という彼の行為はどのように位置づけられるのだろうか。

一

曹操の樂府詩が占める歴史的な位置を探るためには、まず、彼を取り巻いていた士人層の教養の実態を知る必要がある。後漢の知識人たちがその精神的支柱としたのは言うまでもなく儒教であり、当代きつての大儒といえは鄭玄だが、『後漢書』本伝は、漢末知識人社会の空気を伝える次のような興味深い逸話を載録している。

時に大將軍袁紹 兵を冀州に総べ、使を遣はして玄を要へ、大いに賓客を会す。玄の最後に至るや、乃ち延きて上坐に升らしむ。……紹の客には豪俊多く、並びに才説有り、玄の儒者なるを見て、未だ通人を以て之を許さず、競ひて異端を設けて、百家互ひに起く。玄は方に依りて辯対し、咸問いの表に出づ。皆 未だ聞かざる所を得て、嗟服せざるは莫し。

ここから読み取れるのは、様々な学芸に広く通じている人物を「通人」と称して、それを一つの理想的人間像とする気風である⑧。そして、儒学者として知られていた鄭玄は、袁紹の下に集った濟々たる多士の先入観を見事に裏切って、その教養の広さ、多才さを一座の人々に見せつけ、彼らを一人残らず感服させたのであった。袁氏の滅亡後、その傘下から曹操に帰順してきた知識人として、たとえば張範、崔琰、王脩、陳琳といった人々がいるが、彼らもまた、こうした知的サロンの空気を日常的に呼吸していたであろう。

当時の知識人たちが幅広い教養の持ち主であったことは、曹植と邯鄲淳とを巡る次のような逸話からも知られる。す

なわち、邯鄲淳は博学にして文学的才能に恵まれ、文字学にも造詣の深かった人物で、劉表の割拠する荊州に寓居していたが、荊州の帰服と同時に曹操に召しだされた。時に曹丕は広く「英儒」を招き集めており、邯鄲淳を「文学」の官に配属させたいと願いだしたが、曹操は彼を曹植の下に就かせた。曹植は邯鄲淳を得たことを非常に喜び、まず彼の前で胡風の舞踊、玉や剣を用いた雑技、俳優が行うような小話数千言を披露してみせ、しかる後に儀容を整えて、万物創生に始まる哲学談義、古来の偉人に対する人物評論、古今の優れた文学への称賛から、政治的実務や軍事的情勢判断に及ぶまで、この当世第一級の知識人と語り合った。そして、こうした談論がひとしきり交わされた後に酒や炙り肉が運び込まれたが、座中の人々は皆圧倒されて呆然とするほかなかつたのだという（『魏志』王粲伝裴注引『魏略』）。

多彩かつ広範な分野に涉って自由闊達に行われるこのような談論は、曹丕の主催する宴席においてもまったく同様に認めることができる。彼は、その「朝歌令吳質に与ふる書」（『文選』卷四十二）の中で、袁氏一族を平らげた後の南皮での游宴を回想して、

既に六経を妙思し、百氏に逍遙し、彈碁をば間設け、終るに六博を以てす。高談は心を娛しましめ、哀箏は耳に順ふ。……従者は笳を鳴らして以て路を啓き、文学は後車に託乗す。

と記している。曹丕と「文学」の官人たちとの遊びは、儒教の經典に対する検討考察や、諸子百家の著述について思いをめぐらすことから、彈碁や双六といったゲームにまで及び、そこには哀切な響きを奏でる箏曲がバックグラウンドミュージックとして流れているのであった。また、同じ曹丕の「吳質に与ふる書」（『文選』卷四十二）にも同様な遊びを描写して、

觴酌（酒杯）の流行し、絲竹（管弦樂）の並び奏するに至る毎に、酒は酣に耳は熱し、仰ぎて詩を賦す。と見えている。こうしてみると、この当時の宴の場では、管弦樂の流れの中、儒学、諸子百家の思想、文学といった様々な分野の学芸が、消閑的娛樂とも渾然一体となつて行われていたと判断されよう。

更に、曹丕渾身の力作「典論論文」（『文選』卷五十二）には、次のような注目すべき記述も見えている。

蓋し奏議は宜しく雅なるべく、書論は宜しく理なるべく、銘誄は実なるを尚び、詩賦は麗しきを欲す。此の四科は同じからず、故に之を能くする者は偏るなり。唯だ通才のみ其の体を備ふるなり。

ここでは、儒教的価値観に則って書かれる政治的公文書「奏議」が、いわば純文学的韻文である「詩賦」と同一平面上に並置されている。そして、「奏議」「書論」「銘誄」「詩賦」の「四科」全てに長ずることは難しいとしながらも、それらを兼ね備えることのできる「通才」を、一つの理想的な文人像として掲げているのである。思えば、かの建安七子は、それぞれその得意とする文体こそ異なってはいたけれど、基本的にはここにいう「通才」と呼びうる人々ではなかったであろうか。また、各種の文体を総称して「四科」と称していることも興味深い。この語は、『論語』先進篇にいわゆる「四科（德行、言語、政事、文学）」を想起させるが、この儒家的な色を帯びた熟語が、純文学たる「詩賦」をも包括しているということは、当時、文学が儒家に拮抗対立する概念ではなかったことを端的に示しているだろう。

今、建安文壇に関する文献を中心に、儒教と文学とが一つの場で交じり合いつつ共存している状況を見てきたが、これは決して曹氏父子の周辺にのみ見られる現象ではなかった。そのことは、先ほどの袁紹サロンに迎え入れられた鄭玄の逸話から見ても明らかである。曹魏政権における「文学」の官も、おそらくはこうした時代の気風を鋭敏に反映して設置されたものではなかっただろうか。

二

後漢末の知識人たちは、儒教一辺倒ではない幅広い学術文芸に親しむことを理想としていた。とすると、儒教的価値観からは少しく距離のある娯楽文芸に対しても、比較的好意的にこれを受け止めた可能性がある。では、彼らと楽府詩との関係は、果たして実際のどのようなものだったのだろうか。

楽府詩は、俗楽に乗せて歌われる歌辞と定義できるが、後漢時代、そうした俗楽歌謡が行われるのは宴席においてで

あった。たとえば、後漢半ばを代表する文人、張衡の「南都賦」(『文選』卷四)には、後漢の南の都、宛の街で繰り広げられる宴の様子を描写して次のようにいう。

是に於いて齊僮唱ひて趙女列す。坐しては南歌し起ちては鄭舞し、白鶴は飛びて繭は緒を曳く。……箏を弾じ笙を吹き、更新声を為す。寡婦は悲吟し、鷓鴣は哀鳴す。坐する者は悽愴して、魂を蕩し精を傷る。

ここにいう「寡婦悲吟、鷓鴣哀鳴」とは、夫を失った女性や、おそらくは連れ合いとはぐれたのであろう鷓鴣をテーマとする歌曲が、悲哀の情感たつぷりに、箏や笙の奏でる「新声」の響きとともに歌われる様子を写し取ったものである⑨。はぐれ鳥のモチーフは、同じ張衡の「舞賦」(『藝文類聚』卷四十三)にも、

修袖を抗げて以て面を翳ひ、清声を展じて長歌す。歌ひて曰く、驚雄逝きて孤雌翔り、帰風に臨みて故郷を思ふ。と詠じられているし、古樂府「双白鵠」(『玉台新詠』卷一)も、そうした内容の歌曲が宴席で歌われていたことを示している。俗樂歌謡が宴席で演じられる様子は、漢末の文人、辺讓の「章華賦」(『後漢書』文苑伝下)にも見える。辺讓は、後にその侮蔑的な毒舌が災いして曹操に殺されることになる人物だが、楚の靈王に設定を借りながら、当代の宴席の一情景を次のように描写している。

是に於いて遂に章華の台を作り、乾谿の室を築き、……長夜の淫宴を設けて、北里の新声を作す。……是に於いて宓妃を招き、湘娥に命じ、齊倡列し、鄭女羅なる。激楚の清宮を揚げ、新声を展じて長歌す。繁手は北里を超え、妙舞は陽阿よりも麗し。

これらの賦を作った張衡や辺讓は、実際にこうした俗樂歌謡が奏でられる場に居合わせる機会を多く持っていたと思われるが、かかる歌舞音曲に慣れ親しんでいたのは、何も彼ら文人肌の人間ばかりではない。後漢の代表的な儒学者であり、先に見た鄭玄をその弟子に持つ馬融もまた、軽艶淫靡な俗樂を深く愛好した人物の一人であって、『後漢書』馬融伝は、その享樂的日常生活を次のように伝えている。

融は才高くして博洽、世の通儒為り。諸生を教養すること、常に千数有り。涿郡の盧植、北海の鄭玄は、皆其の徒

なり。琴を鼓するを善くし、笛を吹くを好み、生に達し性に任せ、儒者の節に拘らず。居宇器服には、多く侈飾を存す。常に高堂に坐し、絳紗張を施し、前には生徒に授け、後には女樂を列す。

これと同様な記述は、同書盧植伝の方にも「(馬)融は外戚の豪家にして、多く女倡歌舞を前に列す」と見え、ちなみに盧植は眼前の女樂に一瞥もくれなかったが、馬融は自分の資質とは異なるそんな弟子に敬意を払ったという。なお、これとよく似た状況は、すでに前漢末の張禹においても認められる。彼は儒学を修めた高級官僚であるが、彼もまた馬融と同様に俗樂を好み、享樂的な性格の弟子戴崇とともに、俳優や婦女を交えた宴席の楽しみを心ゆくまで享受する一方、もう一人の生真面目な弟子彭宣に対しては専ら儒教の経義について論じ、二人の弟子はそれぞれ自分のあり方に自得していたという(『漢書』張禹伝)。こうしてみると、前漢の末頃からすでに、儒教と軟派な宴会芸能とは何の矛盾もなく共存していたようである。そういえば、先に見た曹丕主催の宴席でも、管弦樂の調べが流れる中、儒教の經典をめぐる高踏的な談論が繰り広げられていた。

さて、漢末の名士たちも、もちろんこうした宴席を知的社交の場としていた。たとえば、その不遜な言動が曹操の不興を買って免職に追いやられ、その後一年余りして太中大夫に拜せられた孔融は、張璠『漢紀』(『魏志』崔琰伝裴注引)によると、閑居の中で次のような日々を送っていたという。

家に居り勢を失ふと雖も、賓客は日々其の門に満ち、才を愛し酒を樂しみ、常に嘆じて曰く、「坐上に客常に満ち、樽中に酒空からざれば、吾に憂ひ無し」と。虎賁の士に貌の蔡邕に似たる者有り、融は酒酣となる毎に、輒ち引きて与に坐を同じくして曰く、「老成の人無しと雖も、尚ほ典刑有り(『毛詩』大雅、蕩)」と。其の士を好むこと此の如し。

ここに言及されている蔡邕といえ、曹操もまた尊敬してやまなかった後漢末第一級の文人であるが、孔融はその人に容貌の似た者を近衛兵の中に見つけ、賓客の大勢集う宴の席で、『毛詩』の句をそのまま用いてこれに戯れたのである。また、当時の名士たちは、政治上軍事上の重要な判断でさえ宴席という場で行っていたようであって、たとえば、代々

名儒を輩出した家柄出身の鄭太（鄭泰）が、何顒や荀攸らと董卓の誅伐を謀った経緯について、『後漢書』鄭太伝は次のように記す。

（董）卓既に都を長安に遷し、天下は飢乱して、士大夫多く其の命を得ず、而して公業（鄭太）家に余資有り、日々賓客を引きて高会倡樂し、贍救する所者甚だ衆し。乃ち何顒・荀攸と共に卓を殺さんことを謀るも、事洩れ、顒等は執へられ、公業は身を脱して武漢より走り、東のかた袁術に帰す。

ここで注意したいのは、鄭太が倡樂を交えた宴席に大勢の賓客を招いていたという記述と、何顒や荀攸との董卓謀殺の打ち合わせを記す部分との間に「乃」という字が入っていることである。この虚詞は、二つの行為が紆余曲折を含むゆるやかな関係で結びついていることを示すが、その関連性とは、董卓を介してつながる行為だということ以上に、場のつながりを示しているのではないかと私は考える。何顒や荀攸といった当代一流の名士たちは、鄭太の主催する宴席に賓客として招かれており、そこでの談論の中で董卓討伐の計画も持ち上がったのではないだろうか。なお、何顒は、無名時代の若き曹操を高く評価した人物で、後に曹操の片腕となった荀彧をも知り、曹操のライバル袁紹とは奔走の友であったし、荀攸は荀彧の甥で、後に曹操の側近の一人となった人物である。

宴席という場にかくも深く馴染んでいた知識人たちにとって、本質的に宴席芸能である樂府詩は必ずや身近な存在であったはずだ。ところがこの当時、作者名を冠した樂府詩は極めて稀である。数少ない事例として、『文選』卷二十七所収の古樂府「飲馬長城窟行」が、『玉台新詠』卷一では蔡邕の作となっていることが挙げられるが、この作品を詠み人知らずとする説があるということ自体、当時の知識人たちがいかに樂府詩制作に抵抗感を持っていたかを物語っているだろう。この当時、文学界の主流といえばまず辭賦であり、『詩経』以来の伝統を持つ四言詩であった。ただし、後漢初期の文人傳毅が、すでに娯楽的な軟派文芸に接近していることから考えると⑩、古典的な知の世界の住人たちも、表の正統派文学とは関わりあわない部分で、気軽な筆の遊びとして歌辞を作ることでもあっただろうと想像される。

それでは、このような流れの中に曹操の樂府詩を置いて見てみると、その文学史的意義はどこにあると考えるのが

妥当だろうか。彼自作の歌辞を乗せた俗楽は、後漢の時代、上流階級の宴席では恒常的に享受されているものだった。しかし、表立ってそれに填詞しようとした知識人はかつて存在しなかった。とすると、曹操の楽府詩は、正統派文学の裏で長く伏流していた娯楽文芸を、文学の表舞台に引つ張り出したものであると位置づけることができるだろう。建安文学と漢代文学との連続性は、このように複線的に捉えるのが妥当であるように思われる。

三

後漢の時代、知識人たちは宴席で俗楽歌謡に親しんでいるが、その歌辞を署名付きで制作することには少なからず躊躇を覚えていた。そんな彼らの目に、曹操の楽府詩制作という行為はどのように映じていただろうか。文学的営為としてこれを推し量ってみた場合、素直に見れば、それは知識人たちを驚かせることはあつたとしても、彼らの称賛と尊敬とを集めるような結果には決してならなかったと想像される。

だが、そうした反応に対しては、曹操は存外かまわなかったのではないかとひそかに思う。というのは、彼自身において文学はそれほど重大事ではなかったように看取されるからである。このことを推測させるのが、『魏志』杜襲伝に記された、建安七子の一人、王粲にまつわる次のような逸話である。

魏国既に建てられ、(杜襲は)侍中と為りて、王粲・和洽と並び用いらる。粲は彊識博聞にして、故に太祖(曹操)の游観に出入するに、多く驂乗するを得るも、其の敬せらるるに至りては洽・襲に及ばず。襲嘗て独り(曹操に)見えて、夜半に至る。粲は性躁競にして、起坐して曰く、「知らず、公は杜襲に対して何等を道ふなるや」と。洽笑ひて答へて曰く、「天下の事は豈に尽くること有らんや。卿は昼に侍すれば可なり。此に悒悒として、之を兼ねんと欲するか」と。

侍中となった王粲は、その博識によって近侍が許されたばかりでなく、魏国の新しい制度を作り上げ(『魏志』王粲伝)、

また、建安二十年（二一五）の張魯征伐については五言の從軍詩（『文選』卷二十七所収）を作ってこれを賛美したのであったが（『魏志』武帝紀裴松之注）、それでも同僚の和洽や杜襲ほどには尊敬されず、「天下の事」に参加させてもらえないことにいらいらと焦燥感を募らせていたのであった。王粲は言うまでもなく当代一流の文人であるが、その活躍は、もっぱら魏国を立派に飾るという文化部門に限定されていたのである。この彼に対する待遇は、そのまま、文学に対する曹操の姿勢を象徴しているように思う。

それでは、曹操は実務には関わらない文学や学問を軽視していたのかというと、事實はむしろ逆である。周知のとおり、彼は自らの下に集まってきた学者や文人たちを非常に丁重にもてなし、意外なことに彼らのある者に対しては、純粹な憧憬の気持ちさえ抱いていたらしいふしがある。たとえば、もと袁氏傘下にいた王脩に対する次のような逸話である。

太祖（曹操）鄴を破りて、審配等の家財物貨を籍没すること方を以て数ふ。南皮を破るに及びて、（王）脩の家を閱するに、穀は十斛に満たず、書數百卷有り。太祖歎じて曰く、「士は妄りには名有らず」と。乃ち礼辟して司空掾と為す。（『魏志』王脩伝）

數百卷の書物を見て感嘆した曹操の言葉は、それがほとんど反射的に口をついて出たもののようにあるだけに、名士を取り込もうとする下心から出た意識的な賛辞などではなく、むしろその衷心から思わず漏れた素直な感想であったように感じられる。

曹操の知識人に対する憧れは、海内の清議でかの鄭玄とともに「青州に邴・鄭の学有り」と称された名士、邴原についても認めることができる。たとえば、建安十二年（二〇七）、三郡の単于を北伐した曹操が酒宴を設けて士大夫たちをねぎらった時のこと、『邴原別伝』（『魏志』邴原伝裴注引）は次のような逸話を伝えている。

太祖曰く、「孤反れば、鄴守の諸君は必ず將に來り迎へん。今日明旦、度るに皆至らん。其れ來らざらん者は、獨り邴祭酒有るのみならん」と。言ひ訖りて未だ久しからざるに、原先づ至る。門下の謁を通ずるや、太祖は大いに驚

喜し、履を擧りて起き、遠く出でて原を迎へて曰く、「賢者とは誠に測度し難し。孤は君は將た來ること能はざらんと謂ひしに、遠く自ら屈して、誠に飢虚の心に副ふ」と。謁し訖りて出づれば、軍中の士大夫の原を詣ぬる者数百人あり。太祖怪しみて之を問へば、時に荀文若（彧）坐に在り、対へて曰く、「独り邴原を省問す可きのみ」と。太祖曰く、「此の君の名の重きは、乃ち亦た士大夫の心をも傾くるや」と。文若曰く、「此れ一世の異人にして、士の精藻なり。公は宜しく礼を尽くして以て之を待すべし」と。太祖曰く、「固より孤の宿心なり」と。是よりの後、敬せらるること益々重し。

自分の帰還を出迎えてはくれないだろうと思っていた邴原の来訪を聞くや、履き物を手にとつて跳ね起き、自ら彼を歓迎しに出た曹操の有様やその言葉には、高名な文化人に対するファン心理にも似た憧れの感情が見て取れるように思う。王脩の蔵書を見て感嘆したのと同じく、「名」ある「士」というものを、無邪気なまでに思慕し、仰ぎ見ている曹操の姿がここにある。邴原はその後、軍中で官職を歴任しながらも実務には関与せず、曹操に会見することも稀だったというが（同上『邴原別伝』）、たとえば曹操が遠征に出る際には、彼と同様の資質を持つ名士張範とともに、世継ぎの曹丕の相談役を任せられるほどに尊重されている（『魏志』張範伝）。

このように、曹操は、天下の名望を集める文化人に憧憬の気持ちを寄せる一方、博識の文人を近侍させながらも、天下の大事を彼とともに謀ることはしていない。学術文化に対する、この一見相矛盾するかのように思える姿勢は何を意味しているのだろうか。思うに、学問や文学は、彼が心の底から欲望し、実際にそれを手中に収めつつあったものとは何ら抵触しあうものではなく、だからこそ、無邪気にそれを称賛することさえもできたのではないだろうか。

それでは曹操が心底欲したものとは何か。それは、天下を掌握する力、権力であろう。曹操は、実に注意深く己の野心をカムフラージュしていたように思うが、それでも時折、意外な素直さでこのことを洩らす場合がある。たとえば、これは文学や学問との対比で示された言葉ではないが、劉表父子の割拠する荊州を陥落させるのに出色の状況判断を下した婁圭に対して、曹操は莫大な褒美を与え、「婁子伯は、富は孤よりも樂なり。但だ勢（権力）の孤に如かざるのみ」

と言ったというし、また、後に婁圭が馬超討伐において多くの功績を挙げた際にも、曹操は常々「子伯の計、孤は及ばざるなり」と感嘆していたという『魏志』崔琰伝裴注引『眞書』。曹操にとっては、財力も、智謀を企てる知力さえも、自らが切実に所有したいと願うものでは必ずしもなかったのである。多分、文学的才能や、深い学識に裏打ちされた人徳に対しても同様であつただろう。彼が何を措いても欲したのは、それらの一次元上に位置する力、多彩な人材の一つに束ね、彼らを自在に差配する力なのであつた。そして、この権力欲のベクトルが遮られない限り、権力者としての自尊心が踏みにじられない限りは、曹操はどのようなタイプの人物に対しても、鷹揚にその長所を認め、自らの配下に組み入れようとしたのである。彼に殺された人物は、その理由こそ異なれ、いずれもこの逆鱗に触れた者たちであつた。かの婁圭の最期もまた同じである。

要するに、曹操は実に聡明な権力者であつて、自らの勢力を拡大し、天下を掌中に収めるためには何が必要か、その優先順位までも精確に見極めていたのであつた。曹操の人物像をこのように捉えたとき、彼の樂府詩制作にまつわる不可解さも自ずから氷解してゆくように思う。彼はその軍事的政治的統率者としての思いを樂府詩によつて表出したが、この文学様式は、当時の知識人たちにとつて、それを享受するにはやぶさかではないが、自ら名乗りを上げて作りたいとは思わない、いわばサブカルチャー的な娛樂文芸であつた。そうしてみると、曹操の樂府詩制作は、決して知識人たちの稱賛を集めるような行為ではなかつたはずだ。だが、曹操にしてみれば、別にそれでもかまわなかつたのである。彼はおそらく、自らの志を美しい管弦楽の調べに乗せて歌わせ、聞かせ、それが宴席を大いに盛り上げるならば、そしてそれが配下の人々の心を収攬するのに効果的であるならば大満足だつただろう。それに、樂府詩を作ることは、実は自らを貶めることにもならなかつたはずだ。なぜならば、彼を取り巻く知識人たちも、実はそうした俗樂歌謡を愛好していたのだから。むしろ、体面を気にしがちなエリートは、曹操の率直なもてなしぶりを見て、脱帽したい気持ちにさえなつたかもしれない。

曹操は、しばしば宴席を設けて配下の士人や將軍、兵士たちをねぎらつた。たとえば、先ほど邴原に関連して言及し

た、建安十二年（二〇七）の烏丸討伐の時もそうであったし、また、晩年に近い建安二十年（二一五）、漢中に張魯を征伐した時のこと、武都山より行軍すること千里、升降險阻にして、軍人たちは辛酸を極めたが、曹操は南鄭で張魯の財宝を尽く手に入れると、ここにおいて大いに饗宴を催し、彼らの労苦に手厚く報いたという（『魏志』武帝紀裴注引『魏書』）。彼の樂府詩制作は、これと同じ意図に発する行為だったのではないだろうか。また、こうした宴の席で、実際に曹操自作の歌辞が披露されることも少なからずあったと想像される。

四

曹操の樂府詩は、配下の人々に対する慰勞歎待のために作られたのであって、第一義的には、その学識や文才を誇示せんがためのものではなかっただろう。だがそれにしては、彼の樂府詩の中には、かなり気負った感じの文辞を連ねるものも少なくない。たとえば次に挙げる「短歌行・对酒」（『宋書』樂志三）である。

对酒当歌

酒に向かえば歌うがよい。

人生幾何

人の命はどれほどか。かの李陵も言ったように、

譬如朝露

たとえばそれは朝露のようなものだ（『漢書』卷五十四、蘇武伝）。

去日苦多』

過ぎ去った日々は実に多い。

慨当以慷

高まる感慨にまかせて思いきり嘆くがよい。

憂思難忘

憂える思いは忘れがたいものだ。

以何解愁

何によって憂愁を解き放とうか。

唯有杜康』

それにはただ酒があるのみだ。

青青子衿

「青々とした君の襟、

悠悠我心　はるばると思いを寄せる我が心（『詩経』鄭風、子衿）、

但為君故　ただ君を求めぬ気持ちのために、

沈吟至今』　私は今までずっと深い物思いにふけていたのだ。

明明如月　まだ見ぬその人は、明々と照らす月のようで、

何時可掇　いったいいつになつたらその光を掬い上げることができるのか。

憂從中来　それを思うと憂いが腹の奥底から湧き起こり、

不可断絶』　憂える思いを断ち切ることができない。

呦呦鹿鳴　「ゆうゆうと鹿は鳴き交わし、

食野之苹　野にあるヨモギの草を食む。

我有嘉賓　私によき客人あらば、

鼓瑟吹笙』　瑟を鼓し笙を吹いてもてなそう（『詩経』小雅、鹿鳴）。

山不厭高　山は土を拒まないからいよいよその高さを増し（『管子』形勢解）、

海不厭深　海は水を拒まないからいよいよその深さを増すという（『管子』形勢解）。

周公吐哺　かの周公は口中のものを吐き出して客人を迎えたが（『韓詩外伝』、

天下帰心』　こうあってこそ「天下の人民はなつくのだ（『論語素王受命讖』）」。

今、直接的な引用を括弧で括り、主だった典故表現はその出典を示して訳出したのだが、なぜ曹操はこれほどまでに先人の言葉を踏まえる必要があったのだろうか。

そこで想起されるのは、傘下の士人を評する際、曹操はやや過剰とも思えるほどに経書を引用していることである。一例を挙げれば、建安十九年（二一四）に亡くなった荀攸の功績を称揚する令（『魏志』荀攸伝裴注引『魏書』）は、立て続けに二箇所『論語』を引いて次のようにいう。

荀公達は真の賢人なり。所謂「温良恭儉讓、以てこれを得たり」（学而篇）にして、孔子の晏平仲を「善く人と交はり、久しくしてこれを敬す」（公治長篇）と称せしがごとき、公達は即ち其の人なり。

また、天下に公布された令、たとえば建安十五年の「己亥令」（『魏志』武帝紀裴注引『魏武故事』）や、同二十一年に出された宗廟の祭りに関する令（同注引『魏書』）等にもこれと同様の經典引用を認めることができる。こうしてみると、曹操はしばしば言われるように、名士層の所有する儒教的教養というものに対して、完全に自由な姿勢を保ち得ていたわけではなさそうだ。もちろん、同じ時期の建安十九年、二十二年に発せられた求賢令（『魏志』武帝紀、及び同裴注引『魏書』）では、そうした既成の価値観に拘らない人材登用を、ざっくばらんな文体で広報しようとしているのだが、このような言明が再三行われていること自体、曹操を縛る歴史的社会的制約の根強さと、それに対する彼の格闘とを物語っているように思う。

それでは再び元の問いに立ち戻って、曹操はなぜ、その樂府詩や公文書にかくも多くの典故を用いたのだろうか。前章でも述べたとおり、意外にも曹操は、一流の知識人に対して憧れにも似た気持ちを抱いていたように看取される。しかしその一方で、彼らから発せられる無言の抑圧を鋭く感受していたようでもある。たとえば、先にも言及した邴原は、孔融のごときあからさまな言動で曹操を侮蔑することはなかったけれども、常に曹氏父子と対等な立場でものを言い、古典的教養に照らしつつ、彼らの非常識や知的浅薄さを丁重にたしなめた。『魏志』邴原伝には、次のような逸話が見えている。

（邴）原の女は早に亡くなり、時に太祖の愛子倉舒も亦た没す。太祖は合葬せんことを欲求するも、原は辞して曰く、「合葬は、礼に非ざるなり。原の自ら明公に容れらるる所以、公の原を待する所以の者は、能く訓典を守りて易へざるを以てなり。若し明公の命を聴かば、則ち是れ凡庸なり。明公は焉んぞ以て為ふや」と。太祖乃ち止む。

また、『邴原別伝』（同邴原伝裴注引）は、五官中郎将となった曹丕の主催する宴席で、邴原と曹丕との間に次のようなやり取りがあったことを記している。

太子（曹丕）燕会し、衆賓は百数十人あり。太子 議を建てて曰く、「君と父と各々篤疾有り、菓一丸有り、一人を救ふ可し。当に君を救ふべきや、父や」と。衆人は紛紜として、或いは父とし或いは君とす。時に（邴）原 坐に在り、此の論に与らず。太子 之を原に諮るに、原は勃然として対へて曰く、「父なり」と。太子も亦た復びは之を難ぜず。

ここで興味深いのは、曹氏父子は邴原に対して、決して拒否的対立的な態度を取ってはいないことである。どれほどその言葉が自分にとって屈辱的であったとしても、それがまったくの正論であるだけに、そしてそれが、天下の名望を集め、また自らも尊敬する人物から発せられたものであるだけに、黙ってそれを飲み込むしかなかったのである。邴原の五官中郎将長史への就任が、曹操の面子をまかなぐり捨てた懇願によるものであった（同上『邴原別伝』）ことを考え合わせると、曹操は賢明にも、いずれ乱世が幕を閉じ、安定の時代となった時、本物の教養を身に付けた者こそが世の中を立派に治めていけるのだということを十分に見通していたように思われる。そういえば、最後には彼を死に追いやってしまったが、早期からの漸次教化を説く荀彧の進言に対しても、曹操はいつも喜んでこれに耳を傾けていたという『魏志』荀彧伝裴注引『荀彧別伝』。

このように学問の有用性を知る曹操は、ひるがえって自らを省みたとき、その「文化資本」⑩の貧弱さを痛感せずにはいらなかったのではないだろうか。彼は常々、このことを引け目に感じていたように看取される。たとえば、建安十六年（二一一）頃のこと、逃亡した兵士に連座する妻の処罰をめぐって、大儒盧植の子である盧毓が、諸々の経書を縦横に引きながら、実情に即した寛大な対応を求める意見を申し述べると、曹操はこの議について、「毓の之を執るや是なり。又 經典を引きて意有り、孤をして嘆息せしむ」という判断を下したというが（『魏志』盧毓伝）、学問を我が血肉としている真の教養人であれば、このような物言いはしないだろう。また、彼は生涯勉学を続けたことを自慢して、「長大となりて能く学に勤むる者は、惟だ吾と袁伯業（遺）のみ」と言っていたというが（『魏志』武帝紀裴注引『英雄記』）、これもまた成り上がりの「文化資本」家ならではの言葉だろう。後に魏文帝となった曹丕が、呉の孫権に対して

自らの学問を誇り（『呉志』呉主伝裴注引『呉書』）、その著書『典論』や自作の詩賦を贈った（同注引『呉歴』）というのも、その父と同質のふるまいであったように思う。

そこで、再び想起されるのが先の「短歌行」である。曹操はその俗楽歌辞に故事や古典語をちりばめていたのだったが、それは、今ここで見てきた彼ら父子の言動とまさしく根を同じくする行為である。彼は、自分の教養の浅薄さを知るがゆえに、居並ぶ知識人たちの前で虚勢を張ってつい背伸びをし、その歌辞に自らが持つ知識のありつたけを盛り込まずにはおれなかったのではないか。曹操は、権力の拡大とともに、いよいよそうした情況に追い込まれていったように思うが、そんな彼にとつて、楽府詩という文芸ジャンルは、実は大変に好都合なものでもあった。古典的な正統派文学ではメッキが剥がれてしまうその実力も、サブカルチャーにおいてはほとんど問題視されなくて済むし、眼前にいる知識人たちもまた、内心ではこのような宴席文芸を愛好している。それに、俗楽歌謡は自らが幼少時より慣れ親しんだ文化であるから⑫、ぼろが出てしまう心配もない。かくして曹操は、楽府詩という文芸様式に己の志を乗せ、その中で、自らが持ち合わせている教養を精一杯に發揮して見せたのではないだろうか。

なお、今ここに述べてきたことと、曹操における楽府詩制作の意図とは、必ずしも同一次元で連動するものではない。前章で述べたとおり、曹操が一番に欲したのは天下を支配する権力であつて、その楽府詩も、配下の人心を掌握し、彼らを動かすために作られたと考えて間違いないだろう。後漢時代における楽府詩の行われ方や、当時における宴席文化の影響力から考えて、果たしてそれは一定の効果を上げたと思像される。曹操は、未来を見通す眼識といい、現実に対する冷徹な状況判断といい、実に当代に卓越する権力者であつた。だが、そんな彼にも、どうしても手の届かないものがあった。それが教養である。彼は、教養あふれる知識人たちに憧れにも似た気持ちを送る一方で、彼ら名士たちに対して言い知れぬ畏怖を感じていた。また、彼の権力欲は、しばしば名士層の持つ「文化資本」と交差し、そのベクトルが遮られることも少なくなかつた。曹操の楽府詩における過剰なまでの典故引用は、この彼と漢末名士たちとの抜き差しならぬ緊張関係の上に現出したものであるように思われる。

- ① 渡邊義浩「三国時代における「文学」の政治的宣揚——六朝貴族制形成史の視点から——」『東洋史研究』第五十四卷、第三号、一九九五年。
- ② 渡邊前掲論文は、かなりの追補を加えて『三国政権の構造と「名士」』（汲古書院、二〇〇四年）に収載されている。
- ③ 吉川忠夫「六朝士大夫の精神生活」（初出は『岩波講座世界歴史5』一九七〇年。『六朝精神史研究』同朋舎、一九八四年に収載）に、あらゆる分野に通ずることを理想とする六朝人の志向が、後漢末にすでに始まっていることを指摘する。渡邊義浩「所有と文化——中国貴族制研究への一視角——」（『中国——社会と文化』第十八号、二〇〇三年。渡邊前掲書に収載。）は、この吉川論文を紹介し、渡邊前掲論文の所論と並置させている。
- ④ 岡村繁「建安文壇への視角」（『中国中世文学研究』五号、一九六六年）。
- ⑤ 道家春代「曹操の樂府詩と魏の建国」（『名古屋大学中国語文学論集』第十二輯、一九九九年）。
- ⑥ 王運熙「漢代的俗樂和民歌」（初出は『復旦學報』一九五五年第二期。『樂府詩述論』上海古籍出版社、一九九六年に収載）を参照。
- ⑦ 柳川順子『宋書』樂志と『樂府詩集』——その「相和」「清商三調」の分類を巡って——（『広島女子大学国際文化学部紀要』第十一号、二〇〇三年）、及び「魏朝における「相和」「清商三調」の違いについて」（『九州中国学会報』第四十一卷、二〇〇三年）。
- ⑧ このことは既に吉川前掲論文に指摘する。ただし、吉川論文では、鄭玄もまた「通人」たる資質を備えていたということには言及していない。
- ⑨ 類似する内容の対句として、漢末の蔡邕の「誓師賦」（『北堂書鈔』卷一一一）にも、「離鷗の孤鳴に類し、杞婦の哭泣

に似たり」と見える。なお「鷓鴣」は、その歌辞は伝わらないが、『楽府詩集』卷二十六に引く『古今樂録』によると、「相和」曲の一つに同名の歌曲があったらしい。

⑩ 傳毅の文学については、すでに「後漢前半期の文学的一側面―班固の傳毅に対する対抗意識を通じて―」（『中国文学論集』第三十三号、二〇〇四年）で論じた。

⑪ ピエール・ブルデュー著・石井洋二郎訳『デスタンクシオン』（藤原書店、一九九〇年）を参照。この概念は、渡邊前掲論文でも援用されている。

⑫ 『後漢書』宦者列伝序に、「嬙媛、侍兒、歌童、舞女の玩、綺室に充備す」と見え、俗楽は曹操の生まれ育った宦者の家においても盛んに行われていたことが知られる。

この原稿は、『狩野直禎先生傘寿記念三国志論集』（汲古書院、2008年9月）に寄稿したものです。公刊されたものとは字句に若干の違いがあるかもしれません。

[論著等とその概要]の[学術論文]のNo.25に挙げたものです。